

まさか、自分の思いに政宗殿が気付いてしまわれたのでは。

好敵手としての尊敬ではなく、自分の内に秘めた恋情に気がついてしまわれたのでは。それを気持ち悪いと思われたのでは…。

どんなに拭いても拭っても涙が溢れた。本日三回目の落涙である。いい加減涙が尽きてもいいと思うのだが、それでもない。

記憶が無いのなら、政宗の体に無理を強いてまで記憶を取り戻させようとは思わない。だが、せめて自分が思うことは許して欲しい。

次からはもう、顔に出さないように勤めます。故に、ひっそりと、ひっそりとこの想いを育むことをお許しく下さい。

たとえ、貴殿に触れることが叶わなくても。貴殿が触れてくれることが無くとも。貴殿がなくなってしまう記憶の中で某は貴殿を思い出します。

「政宗殿…。」

ぽつりと呟いた政宗の名が存外自分の中で大きく響いた。

酒が回りきり冷めた手のひらを見ようにも明かりの灯っていない部屋では月明かりで影しか見ることができない。

その手のひらの冷たさが普段の政宗の体温と同じ様で。幸村は自分の頬に自分の手のひらを当てた。

「政宗殿…。」

そのまま顎を伝い、首筋へと下ろす、鎖骨の窪みをなぞり、衿を割る。

外気に晒された胸は実をつける様にその頂きを立ち上がらせた。

グミの実を揉むように幸村は先端をくりくりゆくりゆと摘み上げた。

「あ…。」

思わず漏れた己の喘ぎにきゅつと口を閉じる。

一月半熱を持て余した体は過ぎるほど敏感になっていた。ほんの先端を摘み上げただけでこんなにも感じてしまっている自分が憎らしかった。

本当は奥州に来たら政宗に抱いて熱を抜いてもらえると心の底では期待

をしていた。

自慰では得られないほどの快楽を与えてもらえると思っていた。それが今回叶いそうにもない。いや、今回だけではない、これからの人生、もう自分は政宗を思っただけで自慰をするしか出来ないのだ。

幸村は自分で着物の裾を摘み、ゆっくりと拵げた。そこから陽に犯されていいない真つ白な肌が零れ出た。

肌理の細かい肌の最奥には白いサラシに包まれた幸村の男性器がゆつくりと頭を擡げてきていた。

幸村はサラシを横にずらし、まだ半分程しか血の透っていない肉棒を取り出した。

外気に曝され少し萎縮してしまっただが幸村はかまわず奥に生った袋ごとヤワヤワと揉みだした。

胸の先端を爪で軽く引っかけるのと同時に肉棒のエラの部分にも爪を立てる。

「ああ…。」

上と下を同時に攻めるのはよく政宗がしてくれた。幸村の胸が性感帯なのを知っていてワザと同時に攻める。

『アレ？お前、上と下どっちがいいんだ？』

自分に恥ずかしい言葉を口にするように強要する。

「あ、政宗殿お…。」

大分血の通ってきた肉棒を幸村が大きく擦り上げる頃には胸の頂きは赤く熱れ、これ以上ない程しこっている。これ以上爪を立てたら皮が剥けてしまう。

弄う場所が肉棒しかなくなってしまうた幸村の体は更なる刺激を求めて疼いていた。

幸村はズリズリと這い、自分の荷物の中から血止めの軟膏を取り出した。